

秋野豊氏

第1回講演録



1994年12月1日(木)

於キャピトル東急ホテル

主催 笹川平和財団



目次

はじめに	1
ソ連崩壊からいまへ	2
現在のユーラシア政策	4
1. now or Later ?	4
2. 軍事協定・軍人養成	4
3. CIS国境（外の国境）	5
4. エネルギー供給ネットワーク	5
カスピ海周辺からのエネルギールート.....	6
ソ連（ロシア）の復活度.....	9
北方領土問題に関し、今後留意すべき点.....	15

秋野豊助教授プロフィール

1950年生まれ

早稲田大学政治経済学部卒業

北海道大学法学部修士 北海道大学博士課程修了（法学博士）

北大法学部助手、英国国費留学生としてロンドン大学に学ぶ

在モスクワ大使館でソビエト外交政策調査員

現在、筑波大学助教授

1992年9月より東西研究所のヨーロッパ・センター（在プラハ）主任研究員

1994年4月帰国

はじめに

下記のリストは、1年半ほど前に私がプラハの東西研究所で作ったものです。旧社会主義圏を中心とするユーラシア大陸に、まだ薄い線ですが、いくつかのいままでなかった線が見えてきて、このいくつかの線がどこかでひとつにまとまったときに分裂や統合が起こったりし、新しい政治・経済的な像というもののはっきり出てくるのではないかとということで、11ほどここで挙げてあります。1年半経ちまして、やはりそのうちのいくつかが相当重要になってきていると思いますので、まず最初にご紹介させていただきたいと思います。

一番重要なのはやはりこの第1点目の旧ソ連、特にロシアからのエネルギーをどう供給するのか、そのルートの問題です。価格もそうですが、ルートの問題がいまナンバーワンだと思います。これをめぐって、いま非常に大きなうねりが起こっています。

2番目の点も重要です。ドイツもしくはロシア、

中国、トルコやイラン、そういった大国の隣接国とその隣の関係、つまりいま政治の焦点はある大国と、その隣国としてのそのまた隣国の間で動いているということです。Aという国がありBという国があると、Bという国はAの隣国であるという形で、BとCの間に線が引かれてしまうということが起こっています。これは1994年および1945年、つまり今日からちょうど50年前に戦後体制を決定する「ヤルタ」などでも起こったことです。

新しい例ではチェコはドイツの隣国です。そしてチェコとスロバキアが分かれたことにより、スロバキアはドイツの隣国ではなくなりました。そうするとスロバキアとチェコの間に線が出てきます。チェコはドイツの隣国であるが、スロバキアはそうではないということから線が出てくるわけです。ここから切れ目が始まるという意味です。

3番目の点も重要です。1、2ほど重要ではありませんが、いわば欧米型のモデルでいくのか、アジアの日本型や中国モデルでいくのかといった問題です。これはこの10番目の問題とも多少重な

資料1 ユーラシア大陸の新しい「線」

1. 旧ソ連、特にロシアからのエネルギー供給ルートや依存度並びに価格を軸に引かれる「ロシア燃料線」
2. ドイツおよびロシアという大国の隣国とその隣の国家との間の「大国接線」
3. IMFモデルもしくは中国モデルかといった改革モデルの差から出る「改革モデル線」
4. 兵器をどこの国から調達するかという安全保障・経済に係わる決定で引かれる「武器供給線」
5. ビザなどの相互訪問に関する二国間協定や国境通過点での物や人の取扱いなど運用上もしくは政策上の問題から出る「国境通り抜け線」
6. 少数民族などの集団的な人権問題の処遇をめぐる国家間の「集団人権取扱い線」
7. 交通・通信などの「インフラ線」
8. 地域協力機構や国際機関への参加およびその資格の差からあぶりだされる「囲い込み線」
9. 組織犯罪集団と通関との結びつき地域的ネットワークからできつつある「マフィア線」
10. 共産党を後継する政治勢力の影響力や旧ノーメンクラトゥーラの処遇の違いが織りなす「旧共産党線」
11. ユーゴ紛争の直接的波及のありうる地域を抱える国家からなる「ユーゴ接線」

(「世界週報」1993.8.10号より)

ってきます。つまり一度破れた旧共産党勢力が、衣を変えて政権に復活してくるということが東欧で起こっています。ハンガリー、ポーランド、スロバキアそしてブルガリアなどで起こっていますが、そういったものは従来の政権の経済政策、民族問題へのアプローチなどとは違う路線をもっているわけです。こういう旧共産党の路線や中国的なモデル、またその西側のモデルとあって、どのモデルでいくかということではやはり線が出てきます。兵器の問題も重要ですが、最近ではむしろロシアその他の軍産複合体制をどう残すか、その軍事工業をどう残すかというところで重要であって、政治的な影響力というのはさほど大きくはなく、いまは政治的な意味よりは、対外負債問題などの経済的な意味の方が大きいと思います。

それから通信・交通のインフラ、NATOに入るか入らないか、地域のビシェグラード、中央ヨーロッパの4つのまとまりなどがありますが、そういうものに入るか入らないか。入ることによってできる線、出されることによってできる線、こういうものが出てきます。それからマフィアの線も比較的重要です。特に中国のケースを考えるとときには重要になっております。ちなみに、NATOはともモスクワの目からすると米国とダブっており、NATO=米国「接線」と見た方がよいと思います。

このようにいくつかの新しい線が見えてきています。今日はなるべくこれに添う形で、どういう線が旧ソ連のまわりに見え始めているのかという角度からお話させていただきたいと思います。

ソ連崩壊からいまへ

ソ連が崩壊いたしました。大きな変化として何が言えるのかということですが、第1の最も大きな変化はやはりこのバルト3国、エストニア・ラトビア・リトアニアが真の意味で独立したということです。それに対してソ連邦崩壊から数年たった現在、バルト以外のところも当初はほとんどが独立へ向かって大きく進んでいったわけですが、時とともに独立志向が薄れ、独立の基盤も気力も小さくなっていきました。そして旧ソ連のなかに求心力、ロシアに向かってもう一度戻っていくという流れが出てきております。

その意味では旧ソ連には15の国がありますが、ロシアとバルト3国の4カ国を除く11カ国については「領土の変更」があったのか、さらに言えば国境線の変化があったのか。これは普通の意味での領土の意味ではなく、「旧ソ連のどこの部分がロシアでなくなったのかどうか、ソ連でなくなったのかどうか」という漠然とした言い方ですが、上記11カ国については本当の意味で独立していない、これからもしていかないだろうという予想が立てられます。

それに対してこのバルト3国については実質的意味で独立だといえます。言い方をかえるとこの3つだけが独立したということは、旧ソ連の大きな地図の中でここでは領土的な変化、国境線の変化がはっきりあったということです。他のところではいろいろな国が独立しましたが、それは本当の独立国として残っていくかどうかどうもわかりません。むしろそうではないでしょう。その意味では変化

資料2 ソ連崩壊そしていま

- ①バルト独立（スウェーデン・フィンランド）
 - ②ウクライナ・ベラルーシ（オーストリア）
スロバキア・ハンガリー
 - ③中央アジアの独立
エネルギー、出口の問題
- ※冷戦時代
エネルギー・パイプライン・プライス

はなかったと言えます。しかし、モスクワは少なくともバルトは失ったということが言えると思います。

それに加えてスウェーデンとフィンランドがEUに入ることになり、これははっきりと西側の部分に取り込まれることを意味しています。経済的にも政治的にも安全保障面でもどんどん含まれていく。その意味ではさきほどの大国との接線、その大国を西側と考えていただきますと、スウェーデン・フィンランドと事実上バルト3国が結びつく、接するという意味でそこに線が引かれます。こういう意味でもこれは大きな変化であると言えます。

2番目はウクライナとベラルーシがどちらにいくのかという問題です。これも独立以来、当分独立もしくは中立の傾向があったのですが、ロシア依存の方向に動いています。

次に問題なのがこのオーストリアです。いままで形式的には中立だったわけですが、やはりEU入りで西側に入りますので、これで初めてスロバキアとハンガリーが西側と接することになります。このためここ1年ほどの間、モスクワはスロバキアに「ロシア燃料線」をスロバキアにつなぐ計画などをちらつかせて、プラチスラバの西行きを阻止しようとしています。ともあれこの2つの国がオーストリアと接することによって、やはり接線が引かれてくるということが言えます。しかしこれはNATOの拡大とは違い「大国接線」というよりは「囲い込み線」であり、引き裂く力は強いとは言えません。

ロシアにとって1～2年ほど前の最大の悪夢は、バルト3国、ベラルーシ、そしてウクライナというグループが、スロバキア、ハンガリー、そしてユーゴとつながる西に近いグループに引き寄せられ、その結果ロシアと中欧をさえぎる壁ができることです。

バルトがいわばロシアから出ていく、モスクワから離れていく、ベラルーシやウクライナは中立化していく。中欧の東よりの部分は西側に入っていく。そのうちに中立に向かう部分が少しずつ取り込まれてくる。こういう形ですっぱりとロシア

と西側の間に壁ができること、これがモスクワにとっての最大の悪夢でした。現在の状況はベラルーシとウクライナは東に向き直した、バルトはまあ出ていこうだろう、こういう形でまた東西の柔らかな壁ができるかもしれない、こういうところまでできております。これが第2番目の大きな変化です。

3番目の大きな変化は中央アジアが独立したということです。この中央アジアの独立というのはどの程度の独立なのかよくわかりません。これについては後に詳しく説明いたしますが、一応独立したということによりいろいろな可能性が出てきます。つまり東側に中国圏、中国があります。南側にはイスラム圏があります。そして中央アジアがあり、そのうちのいくつかのものはロシアとともに生きていこうとし、いくつかのものは場合によってはイスラム圏としていき、場合によっては独自に生きていこうとさまざまな志向があります。ここのところはまだはっきり動きが決まっていません。全体的には当初はモスクワから離れて生きていこうという動きが強かったわけですが、それがいまロシアに戻っているところですが、それがどこへいくのかまだわからない状態です。

問題は中央アジアにガスや石油などのエネルギーがあり、それをどうやって西側、いわゆる国際市場に持ち出すのかという非常に大きな問題があります。この中央アジアは本来イメージとしては貧しい国であったわけですが、このエネルギーの問題があるがゆえに注目され、ここにいろんな勢力が入り、草刈り場になり始めているということが言えます。もう一度繰り返しますが、1～2年前に比べロシアは中央アジアのコントロールを強め、成功しているわけですが、この問題がどんどんクローズアップされていき、行方はわからないという状態になってきました。

冷戦においてソ連は敗北したわけですが、2つほど大きな要因があったらこうだと思います。

ひとつはシベリアのエネルギー資源を世界市場に送り出す術をもっていなかったということです。これをどうパイプラインで太平洋やヨーロッパの方にもっていくか。この問題をモスクワは自力で

は解決できなかったわけです。そこにつけこんでアメリカはパイプラインを作ってロシアのエネルギーを世界市場に持ち込むのを、友好国に圧力をかけブロックすることに成功したわけです。もしアメリカがそれに成功しなければ、逆に言うと、ソ連がこのパイプラインを作ってエネルギーをどんだん外に売ることができれば、またサウジが石油を増産するなどでプライスが下がらなければ、冷戦は本当にソ連の敗北に終わったかどうかはわからないとさえ言われるほど大きな問題です。

いま冷戦が終わり、この巨大な旧ソ連のエネルギー資源を求める目が、しかもそのエネルギーの場所が以前のシベリアからカスピ海周辺に戻ってきています。ソ連は意図的にここにある埋蔵量を低く見積もって、シベリアに注目を集めてそこを掘らせたという説がありますが、そういうものも新しい時代になって変わりました。カスピ海を中心とする中央アジアのエネルギー資源ををいまだこへ出すのか、どういうルートで出すのかということが非常に大きな問題になっています。

現在のユーラシア政策

1. now or Later ?

次にいまのロシアのユーラシアに対する政策を、2つの考え方に分けて考えてみます。焦点はいま行動に移すべきなのか、それとももう少し待つべきなのかというように分けることができます。おおざっぱな分け方ですが、まず旧ノーメンクラトゥーラおよび大ロシア主義者などからなる右派があります。いろいろなものがこの中に含まれています。ロシアはCISをがっちりコントロールすべきであるとか、ソ連帝国を復活させるべきであるとか、ロシアは強いんだとか、そういったタイプのグループです。国にとって重要なのはやはり領土だから、取れるところは取れる時期に取った方がいい。つまり旧ユーゴでセルビアがやっている路線とかなり近いものがあります。領土を取ると国際的に批判されますが、それは長い目で見ればみんな忘れてくれる。正当性をもって実力で取れる場所というのはあまり多くはないので、その意味では「狭い範囲に濃い支配権」を打ち立てた方

資料3 ロシアのユーラシア政策

now or Later ?

右派・軍 now・領土拡大（ユーゴ）

（狭く濃く）地政学的同盟国

外務省 Later（広く、うすく）

軍事協定・軍人養成

CIS国境（外の国境）

エネルギー供給ネットワーク

勢力圏確保

がいい。取れるところは取ってしまっ、しかもそれをすぐやるべきだというような考え方に近いわけですか。

加えてロシアには地政学的な意味での同盟国があります。いろいろな意味で「どうしようもなく」ロシアと結びついている国です。たとえばセルビア、イラク、インドなどの国です。そういう国との連携関係を強めるべきであり、西側とはあまりつきあう必要はないという考え方です。

これに対して現在の路線、つまり外務省もしくはエリツインの路線は、もう少し待った方がいい、時はわれわれに有利だから、という考え方です。時がわれわれに有利ならば、いまはできるだけ自分たちの関与できる範囲を広げた方がいい。そこに薄くてもいいから、がっちり握らなくてもいいから指をかけておいた方がいい。時が経って自分たちに有利になれば、より多く取れるかもしれない。自分の領土に含めるかどうかということはともかく、コントロール力をもつことができる。この方が長い目で見てロシアによりいいという考え方と言っていると思います。

2. 軍事協定・軍人養成

具体的にどんなことをするかというと、ひとつは自分のコントロールやインフレンスを及ぼすことができると思われる地域・国をふやすということです。具体的に言うと、ロシア軍を駐留させる基地をできるだけ多くの旧ソ連の国の中にもてるように軍事協定を結ぶということです。これは、

軍事的にハード中心に抑えようということです。

2番目は軍人の養成をロシアがやろうとしていることです。これは非常にお金と時間のかかる問題です。新しく独立した国で自前の将軍や将校をつくるということになると10年、15年という時間がかかります。また将校を育てるための学校をつくることは事実上不可能です。そういう関係から旧ソ連軍の将校を雇うことにはなりますが、問題の解決にはなりません。モスクワはある国、たとえばアルメニアをどうしても抑えておきたいということになると、そこで軍隊を創設する際にお手伝いしましょう、何人かをロシアの軍学校に入れましょうと言って育てるのです。いまアルメニアはロシアにとって戦略的に非常に重要なポイントです。アゼルバイジャンやトルコといったイスラムとの競争において、アルメニアは非常に重要です。有名なナゴルノ・カラバフという紛争地域とアルメニア本国から40人を引き抜いて、将校を育成するためにロシアの学校に入れております。この教育機関への競争率は非常に高いもので、倍率は200倍です。200人にひとりしか入れない。そういう施設に40人引き抜いて入れているのです。ロシアは他の地域でもそれをやっています。こういう形で短期的長期的影響力を確保するということです。

3. CIS国境（外の国境）

3番目の点はCISの国境をロシアが守るということです。これは「外の国境」とロシアで言われるものです。ロシア連邦と、たとえばウクライナ、カザフスタンとの間に国境があります。これが「内側の国境」で、国際法上の線です。しかしこの国境は事実上存在しません。すり抜けが全く可能です。「外の国境」というのは、たとえば旧ソ連のタジキスタンとアフガニスタンとの国境です。これはイコールCISの国境ですが、ロシアは「外の国境」と呼んで事実上ここを自分で守っています。

なぜそういうことが行われるのかというと、わけは簡単です。ロシアの国境線は、ロシアが独立してできた国境線ですが、旧ソ連の国境線より長いのです。物理的に長いだけではなくて、地政学的に見ても、これは外で守った方が便利です。

たとえばいまモスクワにとって最も軍事的に脅威となっている場所はタジキスタンです。特にタジキスタンとアフガニスタンの国境です。ここからいわゆるイスラム勢力が入ってくるわけです。この国境線は約700キロで、つまり700キロ守ればいいわけです。以前の国境警備のインフラが整っていますので、それを使ってロシア軍が守ればいい。ところが、もしここを守れないとするとイスラム側はずっと上に入ってきて散らばります。そうするとロシアは次にどこで守るのか。イスラム側はタジキスタンからキルギスタン、その他に入りながらカザフスタンまで入ってくるわけです。すると、カザフスタンとロシアの間には事実上の国境線がなく守れないということに加えて、距離が7000キロあります。つまり10倍の長さになるわけです。したがって、ロシアにとってCISの「外の国境」を守るということが利益であり、現実的ということになります。名前はCISの国境ということになっていますが、事実上ロシアの国境です。

私も何度かこの辺をすり抜けたことがあるのですが、ほとんどの場合、意図的にこの国境を通過する際に小さなトラブルを起こしました。たとえば、パスポートの他にビザを持っているわけですが、そのビザを隠してパスポートだけですり抜けようとするのです。そうしますと必ず止められるわけです。国境警備をやっている現地の兵士ではどうしたらいいのかわかりませんので、必ず上官を呼ぶのです。出てきた上官はまずロシア人なのです。それで「あなたが司令官か」と聞くと、「そうだ」、「あなたはロシア人か」と言うと、「そうだ」となり、そこで私はビザを見せます。見せると、問題ないから通っていけという形で旧ソ連外の世界に入ります。このようにほとんどの場合、外の国境警備ではロシアが指揮をとっています。アゼルバイジャンなど多少の例外はありますが、ほとんどはいまロシアがここを握っていると言っていいと思います。

4. エネルギー供給ネットワーク

それから、エネルギーの供給ネットワーク、つまりパイプラインをロシアが握ろうということが

注目されます。ロシアのエネルギーについてはもちろん、旧ソ連にトルクメニスタン、カザフスタン、アゼルバイジャンなどというエネルギーを産出する国がありますが、そういう国がエネルギーを外に売るときに、必ずロシアのパイプラインを通じてでなければ外に売れないようにここを完全に押さえてしまう。つまり冷戦時代にできなかったことを、いまここでやろうとしているわけです。

最後の点は国際的にこの旧ソ連の地域はロシアのものであって、何か紛争が起きたときにここの平和維持活動をできるのはロシアだけであるという確認、承認を国際的に取り付けるというのが外務省の政策です。こうなればCISはロシアの聖地化していきます。

時間が経てば経つほどエネルギー自給のできない国はどんどんロシアに対する債務が増えていきます。債務が増えていくといろいろなことができます。たとえばタジキスタンの巨大なアルミニウム工場をロシアが買い取る。それから、グルジアとアボアジアとの間の電力網、そこからコーカサスに出ていく電力網があるんですが、その電力網を買い取る。それからモルドワの最近の例ですが、ガス供給会社の株を51パーセント手に入れる。そのかわりプライスを20パーセントほど引き下げて、安く出す。しかし、ロシアがそのパイプを握ることになります。商業パワーと金融市場を通じての拡張が生じております。

カスピ海周辺からのエネルギールート

カスピ海周辺のエネルギー問題に戻ります。カスピ海周辺には巨大なエネルギーが眠っていますが、これをどう出すのかという問題です。ひとつのプランは、これをカスピ海からアストラハンを経由して黒海のノボロシクまで運び、ノボロシクからブルガリアのブルガスに海路で運び込むのです。ブルガリアから今度はパイプラインでギリシャまで運び、ギリシャのアレクサンドロポリスから外に向けて出していくというものです。これがいまロシアが非常に粘って実現しようとしているプランです。(資料4, ルートA)

ブルガリアはある意味でトルコの敵です。ギリ

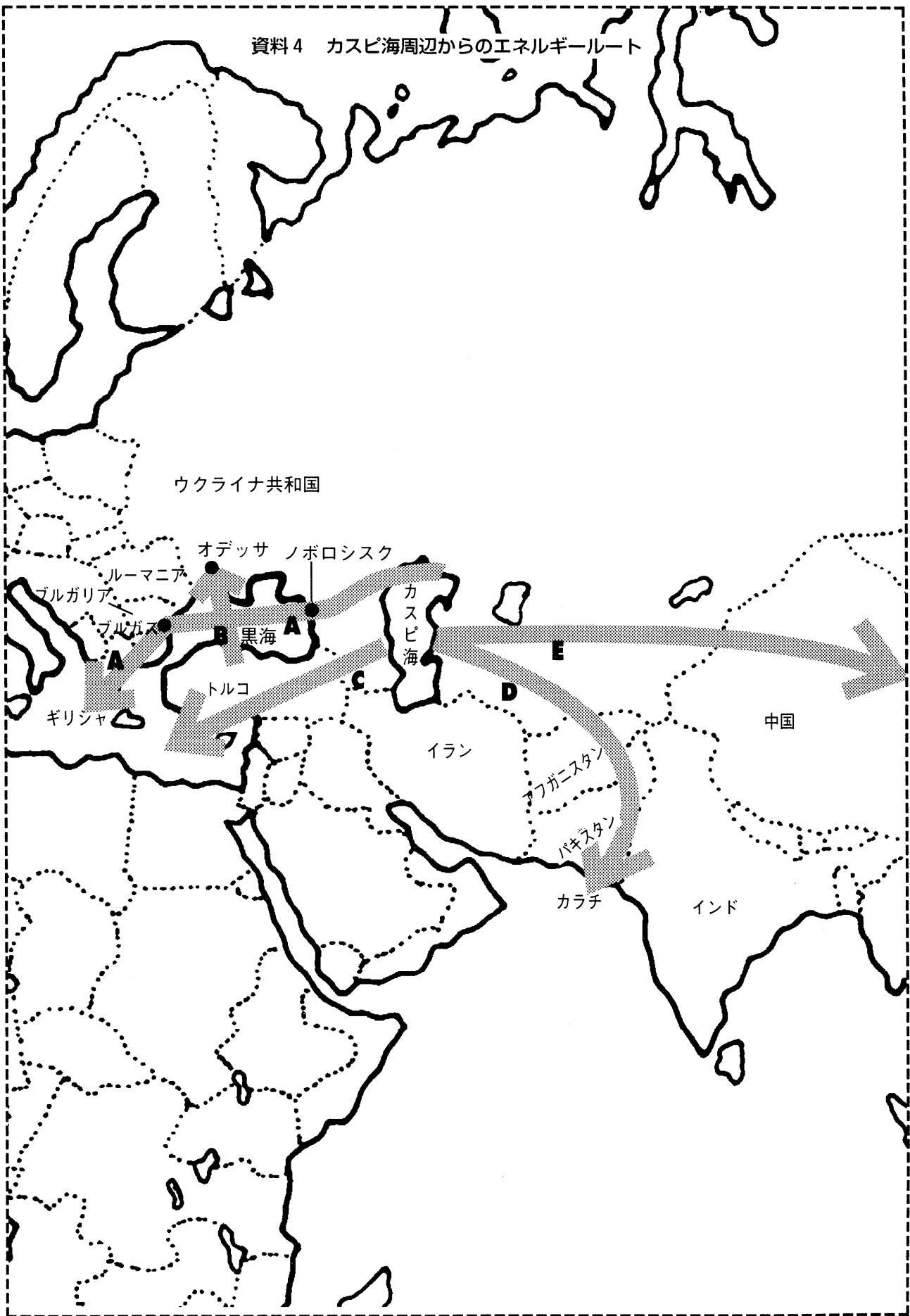
シャもトルコの敵です。しかもこのブルガリアは伝統的にロシアに近い国、親口国であり、ギリシャもそうです。よって、以前の図式通りに流していこうという計画です。これに対してトルコはこの辺の石油をトルコの中を通して地中海にもっていき、地中海から流そうと考えています。これがトルコ側のアイデアです。その際に問題となるのは、西側が敬遠するイランを通らなければならないということです。

もうひとつのアイデアは、トルコからウクライナのオデッサにもっていき、オデッサからウクライナ、スロバキアなどのカルパチア地方を通過して西側に出すというものです。これはウクライナの中の反口派、ロシアのウクライナに対する支配の再確立を嫌がるルフ等の独立派がこれを支持しています。しかし新しくできた親口的議会はこれに事実上反対しています。モスクワが圧力をかけていることは明らかです。これもいまロシアが必死になって阻止しようとしているルートです。(資料4, ルートB)

それから3番目のルートがイランからアフガニスタンを通り、パキスタンそしてインド洋のカラチから出すというルートであり、これが最短のルートです。このルートの問題は、アフガニスタンの内乱が続いていてパイプ建設ができないということですが、西側の部分はいま内乱状態になっていけませんので、この辺を握るカーン将軍たちがそこから見込まれる金銭的な利益に動かされてOKを出しています。(資料4, ルートD)

最後のルートはカスピ海から中央アジアを突っ切ってタリムまでパイプをつなぎ、いま掘っているところですが、タリムから中国に流すルートです。(資料4, ルートE) このパイプラインの流れは次に説明することと符合するものです。つまり旧ソ連の中央アジアに、ロシアスラブのAというベクトルがあります。(資料7参照) これは、ソ連邦が崩壊した後に弱くなり、そしていままた強くなってきているベクトルです。次は中東イスラムのベクトルです。トルコも、サウジアラビアももちろん入るわけです。それからパキスタンも入る、そういうベクトルです。これはソ連崩壊当初、中

資料4 カスピ海周辺からのエネルギールート



中央アジアに対する影響力が非常に強いと思われたわけですが、いま少し力が弱くなってきているベクトルです。これもまだ潜在的ですが、中国のベクトルもこちらに入ってきております。こういう3つのベクトルが外から入り、中央アジアの中からウズベキスタンを中心とする自立志向の中央アジアのベクトルも下から上に上がってきています。

トルコを経由するパイプライン（資料4，ルートB）、パキスタンに流れるパイプライン（資料4，ルートD）はBベクトルに沿い、それから中国に流れるパイプライン（資料4，ルートE）はCベクトル上を、それからノボロシスクを通り、中欧もしくはブルガリアを通り、ギリシャを通り、そこから出すというパイプラインはAベクトルでルートAに沿っているわけです。（資料4）

ソ連はいままで、このカスピ海周辺のエネルギー資源について、アメリカがアラスカの石油に対して行ったのと同じような保存策をとっていたのですが、ソ連崩壊により、それが自分のものだという動きが出てきて問題になっているわけです。ひとつにはトルクメンにしてもカザフスタンにしてもアゼルバイジャンにしても、ここにある巨大なエネルギーをできるだけロシアの手をよらずして世界市場に流したいという問題です。イランもトルコもこれに関しては合意しています。（資料4，ルートC）

モスクワにとって問題なのは、このアゼルバイジャンが親モスクワ派か親トルコ派かということです。当初は親モスクワ派がアゼルバイジャンの政権を握っていましたが、それが民衆の独立意欲に圧されて政権から離れ、その後非常に際立ったトルコ派のリーダーがアゼルバイジャンの代表になります。そしてカスピ海沿岸の石油を掘り出し、西側とトルコ経由で運ぶというプランで動き始めたときにクーデターがしばしば起こっているわけです。これは明らかにロシアが仕組んだものといって差し支えありません。ロシアにしてみると、アゼルバイジャンの中にいるロシア派、それからナゴルノ・カラバフやアルメニアを利用し、とりわけアルメニア、アゼルバイジャン間の戦争を利用してアゼルバイジャンをコントロールしようと

してきたわけです。

こうしてエリチベイ大統領に代表されるトルコ派が追放され、そして新たに登場したのが、ブレジネフ時代、ゴルバチョフ時代の政治局員だったアリーエフという人物です。彼は親トルコ派がクーデターで倒れた後にロシアの後押しでここに入ってきて、当然ロシア一辺倒派となるはずですが、いろいろな経緯からロシアがアルメニアとの戦争で敵側を事実上応援しているということもあり、この中でどんどん立場を変えていきます。そして最初は親口派であったのが、時とともにトルコに向かうようになってきています。バランスはとっていますが、アリーエフが態度を変えてトルコに向き始めていることはたしかです。

9月にアゼルバイジャンの石油を開発するという話が西側とトルコを含めて起こりました。そのとたんにもう一度クーデター事件に近いものが起こりました。これはアリーエフの力で収まりましたが、いつまた起こるかわからないところです。ロシア側が一貫して主張していることは、アゼルバイジャンからロシア領を通り、ノボロシスクまでパイプをつなぎ、ここからブルガスにもっていき、パイプでギリシャから出すということです。（資料4，ルートA）

奇妙なことにロシアの石油関連の人間は比較的このディールに積極的です。どうでもいいから利益を得るために西側との開発に加わりたい。どこで出してもいいという考え方を多少もっています。たとえば首相のチェルノムイルジンはエネルギー関連出身ですが、そういった連中はそれでもいいではないかという多少ソフトなスタンスをとっています。しかしそれに対しては外務省が非常にきびしい態度をとっていて、絶対にそれは許さないという姿勢をくずしておりません。つまり、ロシアの外務省にとってパイプラインをロシアのコントロールの効く形で建設できるかできないかということは、ソ連の対外政策の非常に大きな柱であるからです。親西的な姿勢をもっている外務省がこれに対して強硬です。

2番目の点は、トルコから3番目の点であるオデッサに上げて、オデッサからウクライナに上げ

ていくということです。(資料4, ルートB) ウクライナはモスクワに反抗的な立場から、最近ロシアの支配を受け入れる方向に戻ってきましたが、まだどちらに行くかわからない状態です。いろいろな勢力があるわけです。その中の独立派の方は、絶対にオデッサの石油ターミナルを新しくして石油を受け入れるべきだと主張しています。いまロシアの石油を通じてのコントロールをはねのけるべきだということで論争が起こっております。ただこの問題については、おそらく独立派に勝ち目はないと思います。

Dルートは、カスピ海からカラチに出す一番短いルートです。(資料4, ルートD) 鉄道で運ぶこともできます。中国ルートは日本の三菱が入っている膨大なプロジェクトですが、1500キロほどパイプをタリムまでもってきてここへ出すというプロジェクトです。(資料4, ルートE)

ソ連(ロシア)の復活度(資料5)

次にロシアが旧ソ連においてどの程度支配を回復しつつあるのかということをごっと見ていきたいと思います。

CIS成立の1992年当時と考えていいと思いますが、3つのグループが旧ソ連の中にありました。ロシアから独立する路線を進むというのはバルト3国とグルジア、これはもうはっきりしていました。つまり4つの国がロシアから出ていくという路線を出したわけです。次のグループはモスクワも自分のパトロンとして必要だが、その他にパトロンがあってもいいという等距離志向のグループです。これはモルドワであり、ここにはルーマニアが第2のパトロンとして存在していたわけです。アゼルバイジャンはトルコであり、これとともに生きていきたい。ロシアとも関係を保ちたいが、トルコともともにいきたい、両方から利得を得たい。そしてウクライナもこのグループの中に入っていました。ウクライナの場合、はっきりと西側のどの国と結びつくということはありませんが、西側全体に向いていたということです。ベラルーシも中立路線をとっておりました。この2つがあったのは、前に述べたようにロシアにとっての悪

夢の状態でした。これがはっきりしないということが、当時にとっては大きな問題でした。

非常にはっきりロシアに依存していたのはアルメニアです。それからキルギスタン、次にカザフスタン、そしてウズベキスタンです。トルクメンには天然ガスがありますので、多少距離を置いていました。多少等距離志向に近いところもありますが、イランを明確にパトロン視していないこともあり、ロシア依存に入れていいと思います。タジキスタンも転変しまして、成立当時はモスクワ寄りでしたが次第にイスラムの力が強くなり、次に相当イスラム側になったところで内戦が起こりロシアが入ってきて、いま非常にはっきりとロシアに向いている国です。

それでは現在はどうなったかということ、バルト3国が独立路線として残っています。ここはもう動かないと思います。さきほどの北ヨーロッパとの接点も出てきましたのでこれは出ていくでしょう。ところが2年前に4カ国もあったBグループは事実上なくなったと言っていいと思います。

Cグループはグルジアの参加を見ました。これはAグループから突然Cに入り込みました。しかしまだここではシェワルナゼが権力を確立していませんし、シェワルナゼ自身、アゼルバイジャンのアリーエフと同じようにナショナリズムの方向に動いて行く可能性もあります。しかしグルジアの場合、非常に大きくAからCに変わったことはたしかであり、ロシアはグルジア内に3つの軍事基地を確保しました。グルジアの一部であり、事実上はロシアの一部と言っていいアブハジアには4つの軍事基地を確保しました。軍事的にここは押さえたと言っていいと思います。アブハジアは黒海へのアクセスという意味でも、ロシアにとって重要です。

ウクライナもまだBとCの間にいるのかもしれませんが、Cグループに入ったと見ていいと思います。ベラルーシはB付近にいたものがやはりCのあたりまで来ました。しかし、完全にCグループの中のソ連依存派の一員という状態ではなく、少しゆれている状態ですが、ウクライナよりは少しモスクワに近いという状態です。モルドワも非常に

資料5 ソ連（ロシア）の復活度

1. CISの変化—ロシアを除く14ヶ国、どの程度の独立を望むか
 (a 連邦の結びつき復活、b ロシアのリーダーシップ受容)

成立当時

独立志向	バルト3国（エストニア、ラトビア、リトアニア）	
Aグループ	グルジア	—4ヶ国
等距離志向	モルドワ*、アゼルバイジャン*、ウクライナ、ベラルーシ	
Bグループ		—4ヶ国
ロシア依存	アルメニア、カザフスタン、キルギスタン、ウズベキスタン、	
連邦復活志向	トルクメニスタン*、タジキスタン*	—6ヶ国
Cグループ		

現在

Aグループ	バルト3国	—3ヶ国
Bグループ	なし	
Cグループ	グルジア、ウクライナ、ベラルーシ、モルドワ、アルメニア、カザフスタン、キルギスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタン*、アゼルバイジャン*	—11ヶ国

資料6



大きな変化をとげました。当初はルーマニアの方に進んでいく勢いが非常に強かったわけですが、ここ半年、今年の春ごろからはっきりとロシアに向かう傾向が出てきました。94年初めの選挙でもそういう形で世論が現れています。同胞のルーマニアよりは、昔の友のロシアと生きていくと定め、経済的にもロシアへの依存をさらに強めています。

アルメニアは非常にはっきりとしたロシア依存派であり、ロシアがなければ生きていけない国です。カザフスタンはこれから分裂する可能性があります。現在のところではCグループに入っていると見ていいと思います。キルギスタンはエネルギーがない、その他もろもろの状況からCグループの代表的な国と言っていいと思います。ウズベキスタンは、今後5年から10年間にかけて一番おもしろい国です。ウズベキスタンはBに近くなる可能性があります。これがどうなるかというのは、ユーラシアへのその部分の政治を大きく変える可能性があります。

タジキスタンは前出のように、モスクワの方に最初は向き、それからイスラムの方に向き、内戦が起こり、いまはっきりとロシアの方についている国です。

トルクメニスタンは天然ガスが非常に豊富な国であり、モスクワから距離を置いております。インテリジェンスのネットワークがCISの国の中に入りますが、トルクメニスタンは入っていませんし、いまロシアが旧ソ連を経済的にまとめようとする国家経済委員会を作っておりますが、その中にも入っていません。

アゼルバイジャンはトルクメニスタンにかなり近い状態です。インテリジェンス、つまり情報サービス、もっと言えばKGBのつながりですが、この部分の協定にアゼルバイジャンはトルクメニスタンとともに入っていません。「外の国境」の管理についてもロシアにまだゆずっていません。「外の国境」はまだゆずっていないわけです。またCISの国家経済委員会の中にも入っていません。そういう意味でこの2つはBに近い国です。

ソ連崩壊当初は大きく3つに分かれていました。流れとしては、モスクワから離れていく傾向が強

かったわけですが、現在は寄り戻し現象が起きている、モスクワに向き始めています。ごく最近の流れ、それから将来をよみますと、また、いくつかの国が離れていきそうだという状態になっていると見ていいと思います。

もう一度中央アジアの地図、特に資料7を見ていただきたいと思います。新しい政治が始まっています。昔はこの部分がすっぽりAベクトルの中に入っており、エネルギー、それから地理的なシルクロードのへそにあたる重要な部分であるというアセットというか、特徴というか、いろいろな要素が凍結されていましたが、一応ソ連崩壊で多くの国が独立することによってそこがオープンになったわけです。これはそれに従って入ってきているという図です。

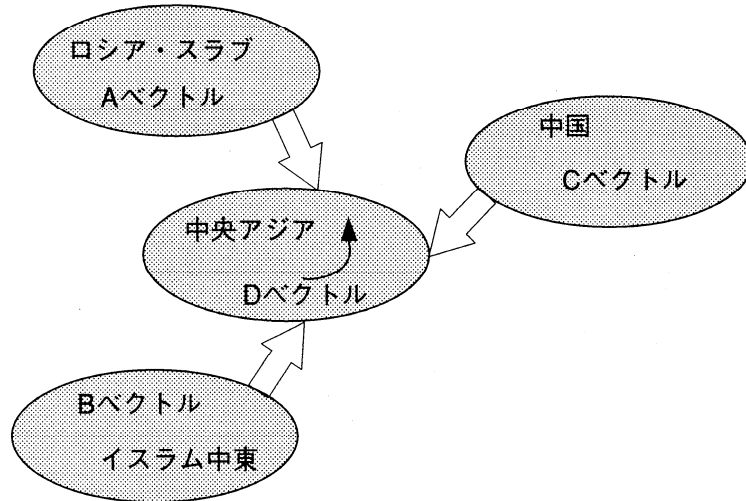
これは日本にとっても重要な意味をもつと思います。今後こういったシナリオが考えられます。まずひとつはAシナリオです。Aというのは上からの、ロシアスラブからの中央アジアに対するベクトルです。これが勝利してしまうというシナリオであり、もう一度モスクワが中央アジアをコントロールするというシナリオです。一番のポイントはタジキスタンです。方向としては最近のタジキスタンの流れを見ると、ロシアの単独支配という方向に進んでいます。ロシアのタジキスタンに対する政策は、ロシアの他の中央アジア全体に対する政策と同じではありません。しかし一番遠いタジキスタンにロシアが、経済的にも政治的にも軍事的にも単独支配を確立しようとする動きになっていることはたしかです。

Bシナリオというのは、下から中央アジアへ上がってくるイスラムの流れです。パキスタンが最初は積極的に援助していましたが、最近ベクトルを突き上げる力としては少し落ちてきました。トルコはまだがんばっているところです。イランも積極的です。金銭的にはサウジが援助しています。アフガニスタンの内乱があるために、これらのイスラムの力はひとつになって、太い、強い力で上に向かってばんと入ることができません。ここで分散してしまいますので、ロシアとしては何とかコントロールできる状態です。しかしここ次第で

資料7 十字路の中央アジア

中央アジアに突き刺さる4つのベクトル—ABCD

- Aベクトルロシア・スラブ (北から)
- Bベクトルイスラム中東 (南から)
- Cベクトル中国 (東から)
- Dベクトル旧ソ連中央アジア
ウズベキスタン (下から)

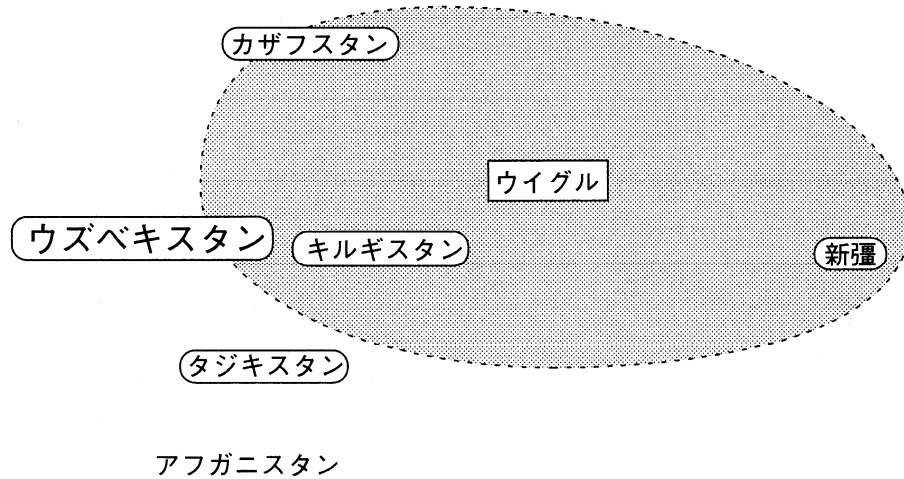


資料8

Aシナリオ
(間接・直接)

Dシナリオ
ADシナリオ
CDシナリオ

Bシナリオ



いろいろ動いていくということが言えます。このBシナリオは確率がいまのところあまり高くはありません。むしろ、パイプラインをどうひくのかというところでの動きはあるだろうと思います。

非常におもしろいのはDシナリオです。資料8でウズベキスタンが特に大きく書いてありますが、

ウズベキスタンが地域の大国となってロシアと離れ、独自の中央アジアの政治を行っていく可能性があります。ウズベキスタンはいろいろな意味で大きな力をもっています。サイズにしても、キルギスタンやタジキスタン、さらにはトルクメニスタンなどにおけるウズベク系の住民の影響力にし

ても、軍事的なアフガニスタンとのつながりにしても、いろいろな意味でウズベキスタンはこの辺を制することのできる力をもっています。ここ5年ぐらいはまだわかりませんが、それから先になると、ウズベキスタンは地域の大国になっていく可能性があります。しかしこの大国はロシアを追い出すほどの大国にはまだなれないと思いますので、どこかの勢力と合同してこれにあたるという可能性があります。それがCDシナリオです。つまりこのDというウズベキスタンの力と、C、つまりチャイナとの間の連携が起こる可能性があります。これは後で説明いたします。これは数年後には考えられるシナリオです。こうなった場合、アジアの地図が非常に大きく変わっていくと思います。

ADシナリオと申しますのは、ウズベキスタン、このいま盛り上がりつつある地域の力と、旧ソ連、ロシアの力とが合同でここにあたるというシナリオであり、これはある意味でこの地域の安定という観点からすると最も好ましいものと思われまゝ。しかしひとつの問題があります。タジキスタンで内乱が起こったときに、最初はモスクワ派が支配し、その次にアフガニスタンに、イスラム圏に向かう方が優先となり内乱が起こったわけです。内乱が起こった時に、モスクワはこれに介入して収めるだけの勇気というか、力というか、そういった意思力をもっていませんでした。またここに入ると第二のアフガニスタンになるのではないかと。ロシアはこれで没落してしまうのではないかと。この恐れが非常に強かったわけです。

そのときにモスクワを促した勢力があります。それがウズベキスタンです。われわれはタジキスタンに入りこの内乱を抑えるべきだと、そしてイスラム勢力を追い出すべきだとはっきり主張し、経済的にタジキスタンの中の最もモスクワに近い勢力、もっと言いますと最も昔の体制に近い勢力に肩入れしたわけです。それを見てロシアはその中に入ってきました。つまりタジキスタンの内乱が起こった92年から93年にかけては、実はADシナリオで動いたわけです。これでこの大きな紛争が一時おさまったのです。

その後このタジキスタンには、ウズベキスタン

系の間ががたくさん住んでおります。またウズベキスタンが直接、間接にいろいろな援助をしました。ところがこのタジキスタンの中で勝利したグループ、クリャーブ系という南の勢力ですが、これはボル・ポト派に近く、貧しくてどちらかというところと教養、文化程度が低くて粗暴な勢力です。そのグループが権力を握ってしまったのです。その結果、権力を独り占めしてウズベキスタンの利益を排除し、ロシアと結びついてしまったのです。

先日、大統領選挙が行われ、2人の人間が立候補しました。1人はタジキスタンの北方の旧レニナバード州の出身者で、アブドラ・ジャーノフという前首相です。この人物はウズベキスタンとロシアとの協力関係でタジキスタンを切り盛りしていくべきだという立場です。つまりADシナリオの人間です。それに対して今回勝利した現職のラフモノフという大統領は、タジキスタンの將軍はロシアとともにだと、はっきりとした路線を出しています。タジキスタンはロシアの一部になりたい、どんな方法でもいいからロシア連邦の一部にしてくれということに密かに依頼している人間です。その意味でタジキスタンの流れは非常に重大ですが、いまの流れからするとAになってしまう。ADシナリオが本当はのぞましいのですが、どうもここにはいかない可能性があります。いかなければウズベキスタンとロシアの間で相当大きな紛争が起こるかもしれません。そこに中国が入ってくるという可能性がいま出てきています。それについて説明します。

ウズベキスタンですが、ロシアからの石油の輸入が、93年にはかなり落ちてきています。100万トンずつくらい落ちており、1年以内には自給が可能になります。穀物も自給が可能状態になってきます。つまりウズベキスタンはロシアに頼らなくてもよくなるわけです。ここで大きな変化が起こる可能性があります。

次の点は、最近カリモフというウズベキスタンの大統領が中国に行き、ある取り決めを交わしました。簡単に言うと、ウズベキスタンは反中国的なグループに加わらない、また中国もしくはウズベキスタンどちらかに、第三国が攻撃を意図した

場合に領土を利用させない、基地を置かせないという、中立条約に近いものを結んだのです。つまり中国との間で、同盟関係への第1歩に向けて走り始めているということです。これに比較すべきなのはロシアとカザフスタンであり、ここでは何かがあったときには事実上ロシアはカザフスタンに助けに行くという、昔のソ連と東ヨーロッパの国の関係の条約と非常に近いものが結ばれております。

このように、ちょっとしたおもしろい系列化が起こっております。カザフスタンとキルギスタンを見ると、カザフスタンはいろいろな可能性があります、一応ロシアに寄っている国です。キルギスタンは非常にロシアに寄っています。カザフスタンとキルギスタンにロシアの力が入り込み、ウズベキスタン、トルクメニスタンに中国の力が入り込む可能性ができています。理由はいくつかあります。

ひとつの理由は、まずモデルから説明します。中国モデルに近いのは、つまり政治的には独裁的であり、経済的には上からの開発という組み合わせのウズベキスタンです。トルクメニスタンももっと独裁に近いものを樹立しており、かなり中国に近いモデルをもっているということが第一点です。これに対してカザフスタン、キルギスタンはロシアの路線になるべく追いつこうとしてもがいているところです。こういう形でモデルがはっきり違うということが言えます。

次の点は、これから問題になっていくと思いますが、ウイグル系の問題です。これは非常におもしろい問題になってきています。中国の西端の新疆ウイグル自治区は1944年から50年まで、旧ソ連の他の中央アジア諸国と同じようにソ連の庇護で東トルケスタンという国を作っていました。ところが毛沢東が中国で勝利し、同じ社会主義同士だということで歴史的な経緯もあってロシアからこれをとったという経緯があります。このウイグル人にしてみれば、自分たちは中国に入ったから独立できずに、極端な言い方ですがいま民族の絶滅の危機に置かれている。ところがソ連の方に入った連中はみんな独立した。そして独立するならこ

れが最後のチャンスだという気持ちをもってきます。これを助けるのか助けないのかという問題です。

地政学的に見ていきますと、カザフスタンとキルギスタンにとって非常にこわいのは中国の人口圧力です。中国からものすごい人間が入ってくるわけです。この圧力には到底抵抗できようもないという恐れがあります。中国を恐れた場合、彼らにとってバッファになるのがウイグルです。ここにトルコ語を話すイスラム系が国を作るところまではいかなくとも自治権を真に獲得できれば、これらの国にとってバッファになる。また、ロシアにとってもここにバッファができるのは悪くない。ですからAベクトルが南東に下ってくるという動きがあり得ます。また地理的にもここは放牧文化圏でロシアに近いところです。ところがウズベキスタンにしますと中国との間に、現在バッファとしてキルギスタンとタジキスタンがあるので、中国を恐れる必要がそれほどないわけです。そうするとここでウイグルなどが動いて不安定な状態になると、イスラム・ファンタメンタリズムの動きが起きてきて、一番まずいのは、強いがもろいウズベキスタンです。ばらばらになる可能性があります。したがって中国と組んでこの地域をおさえようとしています。この地域の安定化が非常に大事だと考える国はやはりトルクメニスタンです。その意味で、中央アジアにブロックとかパクトができあがるわけです。このような動きが10年後ぐらいには出てくる可能性があります。

北方領土問題に関し、今後留意すべき点

最後になりますが、大きく飛びまして北方四島の問題で留意すべき点がいくつかあります。ひとつはソ連邦の中の極東・極北部をいまモスクワとしては維持できない状態になっています。冷戦の時代の超大国としてソ連があったときは、こういう部分をおさえておく意味が当然あったわけですが、最近になってみると、ここに人を住ませて維持するだけの意味がないということに気がつかざるを得なくなりました。そこでここに対する支援、つまりインフラ整備、エネルギー供給、食糧供給などの努力を怠るようになってきました。そのため、どんどんこの地域から人が逃げています。また政府の中でもシャフライなどという実力者が、もうこの辺は捨てていいのではないかという考えを示しております。こういう動きの一部の中で北方四島は見るべきだろうと思います。

モスクワにとり人が出ていくと何がいかというと、金がかからないということです。金がかからずにその領土を失わないというのがロシアにとっては有利となります。北方四島についても場合によってはそのようになるかもしれません。どんどん人が北方四島から本土に向かって逃げてきて人間が少なくなる。人間が少なくなると、維持費はかからない。あとは軍隊やコサック兵だけ置いて、おさえおけばいいという方向に流れる可能性もあります。やはり領土問題に関しては、「元々日本のものであり、ロシアは日本に島を返すべき

だ」という住民が数多く北方四島に住んでいて、そういう運動をコントロールすることの方がむしろいいわけですが、そのバランスがむずかしいと言えます。

2番目は、CISの統合プロセスをよく見る必要があるということです。前出のように、CISがいくつかの地点でばたばたしており、タジキスタンで非常に問題になっております。しかしこれが完全に収まり、CISとロシアの関係、もしくはロシアにとっての外の国境がはっきりしてきた場合に、日本との間の領土問題は話し合いをするチャンスが出てくるわけです。ここががたがたになっている場合にゆずると、連鎖反応が起こります。CISの部分が一応領土問題に関して最終的な決着をみれば、北方四島の問題についても話そうという基盤が出てくるかもしれません。しかし出てこないかもしれません。これは両極端に動くだろうと思います。ここが固まって弱みがなくなったのだから「返すべきではない」というふう動くか、あるいは固まったのだから日本との場合は例外にして返す方に動こうというふうに行くかもしれません。このところはその統合プロセスの中で、右派の流れ、外務省の流れと2つありますが、その流れをよく見ていろいろな働きかけをした方がいいだろうということです。

3番目は、最後のこの点が非常に重要な点ですが、中ロ関係はこれからかなり落ちていくと私は見ています。まず第一に、ロシアと中国との間に流れる大きな川に中州がありますが、つい数年前

資料9 北方領土問題に関し、今後留意すべき点

1. ロシア連邦極東・極北部の動向をウォッチすること
2. 中ロ関係の最近の変化に留意
 - (イ) 残った3島の領土問題
タラバロフ島、大ウスリー島、
バリショイ島(アルグン川)
 - (ロ) 中国による人工圧力
3. CISの統合プロセス

まではそれが大きな領土問題でした。2000以上もの中州の問題がありました。つい最近これが3つにまで減りました。つまりほとんどなくなったわけです。これは非常におもしろいことを意味しています。この2000以上のものが3つになるまでは簡単なプロセスでした。つまり、中国がロシアに領土をゆずっていくというごく簡単なプロセスだったわけです。ところがこの3つの問題については、ロシアの政府が数年かかるだろうと言っております。この問題は非常に解決がむずかしい問題です。なぜかと言えば、中国の人口圧力があるのです。これは川の問題です。北方四島の場合は海です。ここに日本が四島を取ったとしても、取ったことによって起こるのは象徴的な意味しかありません。取ったことによって次々と「その次」が来るという連鎖反応は、やり方によって簡単にくい止めることができます。しかしこの中国の問題は圧倒的な人口圧力の問題があるわけです。

上記3つの中州をゆずってしまえば、このハバロフスクなりのロシアにとって重要な都市に、目の前まで中国人がひしめくようなイメージを与えるわけです。夜間に小舟でロシア側に渡ることはむずかしいことではありません。したがってロシアにとって非常に重要な、解決しにくい問題になっています。この3つがあるので、これからはロシアにとっては日本との領土問題と中国との領土問題を考え合わせれば、おそらく日本の方がやりやすい問題に変わってくるはずですが、この辺の動向をよく見た方がいいと思います。特にこの辺の島で何が起きているかよく見た方がいい。このバリショイ島などはほとんど誰も入ったことがないと思いますが、動向をよく見た方がいいと思います。

貿易についてですが、中国とロシアの間の貿易が三割ぐらい落ちてきたと言えます。これはおそらく回復しないだろうと思います。同じ傾向は中央アジアの5カ国と中国との間でも起こっています。当初あった中国との貿易のうまみが減少す

る、そして中国人が入りこんできて事実上占拠してしまうという恐怖感が中央アジアでも起こり、極東でも起こっています。同じようなことはビルマでも起こっています。ビルマの話は今日の話とは関係ありませんが、事実上中国との国境付近で国境を開けますと、中国人が入ってきて占拠してしまうということです。

いまモスクワには中国人の不法滞在者が6万人いると言われております。全部イリーガルです。極東には750万人しかロシア人が住んでいませんが、ある報告によると極東地域に200万人から300万人の中国人が入っているということです。これもイリーガルに入っている数です。中央アジアにはどれくらい入っているかわかりません。最近減ってきたということですが、おそらく100万人は入っているだろうと思います。

たとえば人口750万人のところ、200万、300万の中国人がわっと入ります。数字が少しオーバーだということを差し引いても、ばらばらではなくある部分に集中して入るわけですから、そうすると事実上占拠されてしまう。ある街の70パーセントは中国人ということが起こります。

またこれも重要な点ですが、ソ連のような大きな国が崩れ、すべて国営工場で作ってきた体制が崩れて、それでも人々はうまく新しい方向に進んでいくことができずにいる。いまだに国に「援助をしてくれ、給料を払ってくれ」と、働かずに頼むことしかできないでいる国民が旧ソ連に多くいる。ここにいる中国人というのはそれとは全く質が違うわけです。国は何もしてくれなくてもいい。とにかく自由にしておいてほしい。そういう精神構造をもった人間がわっとこういうところに入るとぶつかると、おそらく1対3くらいの力の差はあると思います。確実に中国人の方が強い。どんどん入ってきてしまう。この問題が非常に出てきていると思います。これからおそらく中口関係が変化するだろうと思います。それをよく見ていく必要があると思います。